

社会システムの分化と統合

——「システムと生活世界」再考——

赤堀 三郎

ハーバーマスの言う「システムと生活世界」の二元論は、ロックウッドの「社会統合とシステム統合」という区別をもとにしている。この区別は社会学的分析枠組に必要な条件を提示したものと捉えられるが、ハーバーマスは「社会統合とシステム統合」の区別を行為論とシステム理論という相異なる図式において受容しているため、彼の「生活世界／システム」の二元論は社会学的分析枠組として不十分だと言える。ここでは、コミュニケーションの接続過程を社会システムとして捉える観点から、「生活世界／システム」の二元論による社会把握の問題点を指摘し、「社会統合とシステム統合」の区別を捉え直す。

0. 問題の所在

ドイツのユルゲン＝ハーバーマス (Jürgen Habermas) がシステム理論を取り込んで「生活世界／システム」の二元論を提唱したこと、ならびに「システム」による「生活世界の植民地化」のテーゼ (以下、「植民地化テーゼ」と呼ぶ) を打ち出したことは、日本でもよく知られている。しかし、いまや植民地化テーゼはそのアクチュアリティを失ったともいわれる。確かに、1980年代初頭までの旧西ドイツでは、コミュニケーションのあり方、ひいては欲求のあり方にまで政治システム (福祉国家体制を背景とした巨大官僚機構、という意味での) や経済システム (市場経済体制ないし消費社会、という意味での) が浸透してくるという物言いにある程度の意義があったかもしれない。だが、1990年代以降の動向に目を遣ると、ヨーロッパでも日本でも、事情はそう単純に割り切れな

い。確かに今も、(ハーバーマスの言う意味での) 生活世界なる領域に問題が生じているということ を指摘することはできる。だが今、その原因は「システム」だとして果たしてそれで済むのであろうか。

だが本稿では、こういった植民地化テーゼそのものを検討する以前に、まずその背後にある「生活世界／システム」の二元論を問い直す。そもそも、ハーバーマスが「システム」と呼んでいるのは社会が機能的に分化した結果として生じた政治システムと経済システムのことであり、社会システム全般のことではない。「システム」なるものによる「生活世界の植民地化」とは、政治システムのシンボリック・メディアである権力と、経済システムのシンボリック・メディアである貨幣が、生活世界という「コミュニケーション的行為が行われる地平」に入り込んで、相互了解を志向する日常のコミュニケーションのあり方を「成果志向的なあり方」に変えていくことを指す⁽¹⁾。ところがここで用

いられている政治システムや経済システム、そしてメディアといった用語は、タルコット＝パーソンズ (Talcott Parsons) の言う「社会の機能的分化」が前提となっている。ハーバーマスの言う「システムと生活世界」の分離は、パーソンズの言う「社会の機能的分化」において生じるというわけだ。では、生活世界なる領域に対してシステム理論は適用できないのであろうか。「生活世界／システム」の二元論を主張するハーバーマスは、システム理論による生活世界把握をはっきりと拒否している (Habermas [1981=1987:下])。だが、彼が念頭に置くシステム理論とはパーソンズのそれであり、近年の社会システム理論の展開までもが視野に収められているわけではない。それならば社会システム理論の進展状況はどうなのかと言うと、ドイツの社会学者ニクラス＝ルーマン (Niklas Luhmann) の大著・『社会の社会』 (Luhmann [1997]) を参照する限り、一応の到達点は提示されているものと見てよいであろう。そこで本稿では、ハーバーマスの「生活世界／システム」の二元論に対し、ルーマンの社会システム理論をぶつける。詳しくは追いつ追いつ述べていくことにするが、ルーマンの枠組における社会システムとはコミュニケーションという出来事の接続過程のことであるので、生活世界もその意味ではシステム (正確には、システムの作動において立ち現れてくるもの) として捉えることができる。

さらに本稿では、ハーバーマスの言う「生活世界／システム」の区別はもともとイギリスの社会学者デイヴィッド＝ロックウッド (David Lockwood) の言う「社会統合とシステム統合」という区別 (Lockwood [1964]) に由来するものだという点にも注目する。詳しくは後述するが、社会学が社会の分析枠組としてその威力を発揮できるかどうかは「社会統合とシステム

統合」の区別をいかに理論に取り込むことができるかどうかにかかっている。ハーバーマス自身も「社会統合とシステム統合とを分析の上で切り離すのに十分なほどの感度をもった新しい理論的手掛かり」 (Habermas [1981=1987:下284]) が必要だとしている。だがここでは、「社会統合とシステム統合」を取り込んだ理論とはどういうものなのかということ、皮肉にもハーバーマスの主張に反する形で考察していくことになる。

1. 社会の機能的分化とその帰結

1-1 ロックウッドのパーソンズ批判

ハーバーマスの言う「生活世界／システム」という二元論の背後には、「社会の機能的分化」という問題設定があり、そしてロックウッドがパーソンズ批判の文脈で提出した「社会統合とシステム統合」の区別がある。ここでは、まずはパーソンズの言う「社会の機能的分化」とはどういったものなのかということを確認し、続いてロックウッドのパーソンズ批判について見ていくことにしよう。

パーソンズは、N. J. スメルサー (Neil Joseph Smelser) との共著『経済と社会』において「社会の機能的分化」に関する説明をしている。内容は次のようなものである。社会システムはその均衡維持のために四つの基本的なシステム問題 (system problems) を解決しなければならない。よって、社会システムは四つの機能 (適応=A、目標達成=G、統合=I、潜在的パターン維持=L) のうちのどれかを担うサブシステムへと分化する。これがパーソンズの言う機能的分化のプロセスである (Parsons & Smelser [1956=1958:74])。

パーソンズのモデルにおける社会システムの

サブシステム間の関係は、境界相互交換 (boundary interexchange) というタームによって表現されている。例えば、経済システムから見れば他の三つのシステムは環境であるが、経済システムが他のサブシステムに出力するのは「富」wealth (のちに「貨幣」と言い換えられる) である。こうして、生産要素 (入力) と所得の分け前 (出力) が経済システムの境界を越えてその環境との間で交換される。同様に、他の機能 (G、I、L) を担うサブシステムとその環境との間においても、境界を越えた交換プロセスがあるとされる。このように社会システムの四つのサブシステム間で境界を越えて交換されるものを、パーソンズは「一般化されたシンボリック・メディア」と呼んでいる。4システムは、シンボリック・メディア (貨幣、権力、影響力、価値コミットメント) を交換し合うことによって互いの間にある種のギャップを生じさせ、それによって互いの境界を維持する。境界が維持されるので、社会 (全体社会) における A・G・I・L の4機能を担う四つのサブシステムの分立が可能になる。このような、サブシステム分立プロセスがパーソンズの言う「社会の機能的分化」である。つまり、パーソンズのモデルにおいては、社会が機能的に分化しつづける (社会のサブシステムが境界を維持しつづける) ための要件は「シンボリック・メディアの境界相互交換」にあると考えてよい。

このようなことを踏まえた上で、次に、ロックウッドによるパーソンズ批判の要点について述べよう。ロックウッドは、「社会統合とシステム統合」の区別について次のように説明している。社会統合の問題は、行為者間の関係に焦点を絞る。行為者間のコンフリクトもこれに含まれる。一方、システム統合の問題は、社会システムの部分間関係に焦点を絞る。社会システ

ムの部分間のコンフリクトもこれに含まれる (Lockwood [1964:245])。ロックウッドによれば、パーソンズに代表される consensus theory の立場も、ラルフ＝ダーレンドルフ (Ralf Dahrendorf) らに代表される conflict theory の立場も、社会統合についての議論であり、システム統合については触れていない。だが、社会変動にとって重要なのはむしろシステム統合の問題の方——例えば「生産力」と「生産関係」の矛盾のような——である。したがって、社会変動の問題を考えるには社会統合よりもシステム統合に注目する必要がある、とロックウッドは言う (Lockwood [1964])。

次に、ロックウッドの言うこの「社会統合とシステム統合」の区別をなぞる形でハーバーマスが提唱した「生活世界／システム」の二元論について触れる⁽²⁾。

1-2 「生活世界／システム」の二元論

1970年代前半の時点で、ハーバーマスは「社会統合とシステム統合」の区別を次のように説明している。社会統合は制度——その中では、制度によって社会化された各々の主体が話をしたり行為をしたりする——にかかわるものであり、この場合、社会はシンボリック構造を備えた生活世界という相で現れる。システム統合は、システム固有の「制御」機能にかかわるものであり、この場合、社会は複雑で不安定な環境に対して自らの境界と存立を維持するという相で現れる、と (Habermas [1973=1979:7-8])。このようなハーバーマスの発言からもわかるように、彼はロックウッドの言う「社会統合とシステム統合」の区別を、社会統合は行為者が構成する生活世界にかかわるものとし、システム統合は「システム」がもつ境界維持のはたらきにかかわるものとして一気に自らの分析枠組と

して取り込んだ上で、さらに議論を展開しようとしているのである。

そしてこの社会統合とシステム統合との関係は、社会進化の過程で変容してくるとされる。1980年代初頭の大著『コミュニケーションの行為の構造』において、ハーバーマスは社会進化を環節的分化、階層化、国家的組織化、そして制御メディア（権力や貨幣など）というステップを踏むプロセスとして描き出している（Habermas [1981=1987: 下]）。環節的分化の段階にあっては、社会は「平等な部族社会」であり、階層化の段階にあっては、社会は「位階化された部族社会」である。ところが国家的組織化ないし制御メディアの段階にあっては、社会は政治的・経済的に階層化されるようになるという。この最後の段階は、パーソンズの言う「社会の機能的分化」とパラレルだと考えられる。

ここにおける社会統合とシステム統合の関係は、次のように説明されている。制御メディアの段階（機能的に分化した現代社会）にあっては、社会が経済的に階層化されているので、貨幣という制御メディアに基づいて進行する交換プロセスがシステム統合となる。ハーバーマスによれば、このプロセスは「即物化した生活連関」として現れるという。つまり、行為調整の一つのあり方としての社会統合（ハーバーマスの場合、了解を志向したコミュニケーション的行為によって生じるプロセスのこと）が、貨幣や権力といった制御メディアが言語的理解に代わってそれらに基づいて行為調整が行われるという、もう一つの行為調整のあり方としてのシステム統合にとって代わられるようになるというわけだ。手短かに言うと、制御メディアを浸透させること（すなわち、ハーバーマスの言う「機能的命令」）によって、「システム」は生活

世界を分断する、ということになるだろうか。こうして、現代社会ではシステム統合と社会統合の乖離が進行することになるとされる。

このような主張それ自体の可否はさておき、以上のようにハーバーマスは、現代社会をある時は「システム」として捉え、またある時は生活世界として捉える形でシステム統合と社会統合を同時に視野に収めるという二元的アプローチをとっている。以下、このようなパースペクティブを「生活世界／システム」の二元論と呼び、その限界について指摘していくこととしたい。

2. 「生活世界／システム」の二元論をめぐって

2-1 コミュニケーションの接続過程としての社会システム

「生活世界／システム」の二元論が社会学的概念図式として不十分であるということの理由として、ここではイギリスの社会学者マーガレット＝アーチャー（Margaret Archer）の意見を引く。というのは、彼女が「社会統合とシステム統合」の区別は分析的二元論（analytical dualism）と呼ばれる説明プログラムに改変されなければならないと述べているからである。アーチャーによれば、ロックウツの所説、すなわち、社会統合における個人という分析単位とシステム統合における社会システムの部分という分析単位との区別は、昔ながらの「個人主義／集合主義」（individualism/ collectivism）という対立を内包している。よって、「社会統合とシステム統合」の両者を社会学的説明において維持し続けることは難しい。なぜなら、何かを説明するにあたっては「個人的なもの」か「集合的なもの」か、いずれか一方への還元は

避けられないからである。ロックウッドが「社会統合とシステム統合」という区別を打ち出したのは社会変動に対する説明力を高めるためであるが、何を説明するにせよ、ロックウッドの言う区別を社会学的概念図式として有用なものにするには、「行為者と構造」あるいは「行為者と文化」（ないし「行為者と規範」）といった問題を解かなければならない、と彼女は言う（Archer [1996:680]）。

分析的二元論とは、「個人的なもの」か「集合的なもの」かのどちらかに還元せず、しかしだからといって両者を融合させたりもせず、両者の相互関係を解き明かすような二元論である。アーチャーは、このマイクロ・マクロ問題を解くには行為者と構造が互いを形成し合うプロセスに着目しなければならないとし、話をギデンズの構造化理論へと向かわせている。だが、いずれにせよハーバーマスの「生活世界／システム」の二元論はコミュニケーション的行為論とシステム理論という相異なる二つの図式に基づいているので、マイクロ・マクロ問題を解いておらず、アーチャーの言う意味での分析的二元論ではない。以下では、ハーバーマスの言う「生活世界／システム」の二元論、すなわちコミュニケーション的行為論とシステム理論を分析枠組として同時に使用するというスタンスを問い直すという目的から、ルーマンの社会システム理論に引き付けて論じていく。ルーマンの社会システム理論においては社会システムを構成するのは個人ではなくコミュニケーションであり、意識活動や思考といったものは心的システムとして社会システムの環境に位置づけられている。社会システムと心的システムは相異なる図式に基づいているのではなく、システム理論という同じ枠組において捉えられている。よって、このような理論構成は懸案となっている

マイクロ・マクロ問題を解くにあたって有効な方法の一つなのではないかと思われる。以下では、その内容について説明し、それによって「社会統合とシステム統合」の区別を分析的二元論として再解釈する可能性を展望していく。

ルーマンの言う社会システムとはコミュニケーションの連続的産出過程のことであり、心的システムとは意識の連続的産出過程のことである。ここで言う「システム」とは、いずれも何らかの構成素（component）の産出過程のことである。こういったシステム・モデルはオートポイエーシスのシステム（autopoietic system）と呼ばれる。社会システムや心的システムをオートポイエーシスのシステムとして捉えることの利点は、システムと環境との間に「意味」なるものを交換する関係はないということを行い表すことができる点にある。オートポイエーシスのシステムは作動上閉じたシステム（operationally closed system）であるとされ、当該システムとその環境との間には入力や出力のやり取りは存在しない（作動上閉じたオートポイエーシスのシステムとその環境との関係は「構造的カップリング」というタームで表現できるが、これについては後で説明する）。要するに、オートポイエーシスのシステムを行う認知活動は、環境からの刺激に依存するのではなくシステムの構造そのものに依存しているのである。そして、オートポイエーシスのシステムとしての社会システムと心的システムは「システムと要素の関係」ではなく、相互に「システムと環境の関係」にあるので、コミュニケーションと意識との間にも入力や出力を交換する関係はない。社会システムや心的システムとその環境との間に入力や出力がないということは、システムと環境との間に「意味」のやり取りが存在しないということでもある。つまり、「意

味」は環境からシステムへと入って来るのではなく、システムそれ自身によって構成される。オートポイエーシスのシステムとしての社会システムはコミュニケーションの接続においてそれ固有の「意味」を構成するとされ、オートポイエーシスのシステムとしての心的システムは意識の接続においてそれ固有の「意味」を構成するとされる。このような意味でルーマンは、社会システムと心的システムを「生命システム」ではなくそれぞれ「意味構成システム」であると捉えている。

以上まとめると、社会システムと心的システムといった意味構成システムは、それ自身の基準に基づいて「意味」を構成するのであって、システムの外部から「意味」が入力されるわけではない。

そしてルーマンは、ジョージ＝スペンサー・ブラウン (George Spencer-Brown) の学説を踏まえ、観察 (Beobachtung) 概念を「区別 (Unterscheidung) をもとにした指し示し (Bezeichnung)」として定義している (Luhmann [1984=1995:801-802])。意味構成システムはそれ自身の基準 (=区別) に基づいて「意味」を構成する (=指し示す) ので、このプロセスそのものを観察と呼ぶことができる。観察は区別に基づいており、観察の基盤にある区別はシステムにおける意味構成のあり方を決定する。この区別のヴァリエーションによって、システムは各々異なった意味構成を行う。社会システムの場合、区別は、コミュニケーションの接続のあり方、そしてコミュニケーションが何をテーマとするかにかかわる。社会システムが観察を行うにあたって用いる区別は、コミュニケーション接続のあり方を決定するが、コミュニケーションの接続プロセスこそが社会システムそのものなので、その意味で区別は社会システムの

存立基盤となっている。心的システムの場合も同様に、区別が存立の基盤となっている。

「社会システムの観察」という枠組は本稿のなかで重要な位置を占めるので、もう少し説明を付け加えよう。まず、社会システムの構成素であるコミュニケーションとは、単なる「送り手-受け手」の二極間での情報伝達ではない。ルーマンの言うコミュニケーションとは「情報・伝達・理解」という三極から成り立つ出来事である。コミュニケーションという出来事が起こるとき、メッセージを送信する側と受信する側のそれぞれにおいて、ある種の「選択」が行われる。「選択」とは、メッセージの意味内容に関して多様な可能性の中から何が現実の意味内容として選び取られることを指す。メッセージの受け手側では、情報の理解 (環境を指し示すこと; 他者言及) と伝達の理解 (システム自身を指し示すこと; 基底的自己言及) という「選択」が同時に起こっている。わかりやすく言えば、コミュニケーションが起こっている状況 (伝達) を踏まえたメッセージの内容 (情報) が受け取られる (理解)。メッセージの送り手側では、理解という契機を踏まえ、次なるメッセージの送信が行われるが、それもまた、やはりコミュニケーションが起こっている状況 (伝達) とメッセージの内容 (情報) を併せ持っており、それが受け手に伝わる (理解)。以下同様に、コミュニケーションという出来事が接続していく。このようなコミュニケーションの接続プロセスが社会システムなのである。このように考えると、コミュニケーションが接続していくというプロセスにおいては、たえず何らかの「選択」が行われ、それに基づいて発話がなされている。「選択」とは、多様な可能性の中から何らかの基準に基づいてある現実が顕在化することなのだから、コミュニケーション

という出来事は「区別に基づく指し示し」つまり観察である。このような意味で、ルーマンは(心的システムだけでなく)社会システムもまた観察を行うシステムであるとしている(Luhmann [1984=1993-1995])。

2-2 ルーマンの言う「社会の機能的分化」

ルーマンの社会システム理論における以上のような基礎概念を踏まえた上で、「生活世界/システム」の二元論の検討というテーマに戻ろう。権力という制御メディアや貨幣という制御メディアが、了解を志向する行為調整が行われる領域である生活世界を隷属化し、その結果さまざまな問題が生じる。こういったことがハーバーマスの言う植民地化テーゼの内容であった。ハーバーマスは、社会システム理論における「生活世界の構造分化を把握する適切な概念装置の欠如」(Habermas [1981=1987:下 388])を指摘している。これに対して、これまでルーマンの社会システム理論について概観してきたわれわれは、「生活世界/システム」の二元論をとらず、社会システム理論の視座を一貫させることによって現代社会の把握を目指すべきだということを主張してみたい。

植民地化テーゼでは、「システム」における権力や貨幣といった制御メディアが言語的理解に取って代わり、そのようなやり方で「システム」が生活世界を侵食するとされていた。だが、ここで言う「制御メディア」とは、結局、パーソナリティが社会の4サブシステムの間で境界相互交換されるとしたシンボリック・メディアのことである。だが、権力や貨幣といったものは、ハーバーマスの言うように、生活世界なるものとの境界——それがいかなるものであり得るのかはさておいて——を越えて入出力される何ものかとして捉えてよいものなのであろうか。こ

のことを検討するため、「社会の機能的分化」や「生活世界」といったものをルーマンはどのように捉えているのかを見ていく作業に移ろう。

ルーマンの言う「分化」に関しては、ドイツの社会学者ヘルムート=ヴィルケ (Helmut Willke) の説明を参照しよう。というのは、彼がルーマンにおける「社会の機能的分化」というタームを「いかにして観察は可能か?」という問いから説明しようとしているからである (Willke [1987])。既に述べたように、ここで言う観察とは、区別をもとにした指し示しのことである。社会システムにおける観察を可能にするものは、ヴィルケによれば「差異形成」(Differenzbildung)であり、この差異形成がすなわち分化であるという。この定義を受け入れれば、分化とは観察の基盤となる区別が設定されていくプロセスだということになる。

このような分化概念を踏まえてはじめて、ルーマンの「機能的分化」について考えることができる。ハーバーマスの社会進化論についてはすでに述べたが、ルーマンの場合は、社会進化が「環節的分化から成層的分化を経て機能的分化へ」というプロセスとして描き出されている。環節的分化とは全体社会が各々同等の部分システムに分化することであり、成層的分化は全体社会が上層/下層といった具合に不平等にランク付けされた部分システムに分化することである (Luhmann [1990:423])⁽³⁾。他方、機能的分化とは、経済、政治、科学、教育、宗教などが別個の部分システムとして分出することである。これらの部分システムはそれぞれ何らかの社会的機能を担うので「機能システム」と呼ばれるが、ここには部分システムの全体社会への機能的貢献という観点はない。「機能的に分化した社会」は、いわば、脱中心的なのである。

というのは、ルーマンのモデルにおいて社会システムの分化の決め手となるのは、シンボリック・メディアの境界相互交換ではなく、コミュニケーションのコードであるからである。機能システムのコードは、肯定と否定の二つの値を持つので、特に「バイナリ・コード」と呼ばれる。例えば経済は「支払い／不払い」というバイナリ・コードが主導的な差異となっている機能システムであるとされ、学問は「真理／非真理」（つまり「真／偽」）というバイナリ・コードが主導的な差異となっている機能システムであるとされる。

2-3 生活世界と機能システムとの関係

機能システムが以上のようなものであるとして、では、社会システム理論において生活世界なるものをどのように指し示すことができるのだろうか。ルーマンの場合は、現象学における地平（Horizont）と地盤（Boden）というメタファーを検討する作業を通じて、生活世界概念を解釈し直している。現象学において生活世界はある時は地平でありまたある時は地盤であるとされるが、ルーマンいわく「地平は地盤ではなく、人は地平のうちに立つことはできない。人は地平に向かって動くことはできるが、その上を動くことはできない」（Luhmann [1986=1998:103]）ので、地平のメタファーと地盤のメタファーは互いに矛盾する。ハーバーマスの用いる生活世界概念の場合も、この混乱を避け得ていない。

ここで、コミュニケーションや意識がその接続過程において「意味」が構成されるという社会システム理論の枠組を想起していただきたい。この枠組では、生活世界は所与の「確実な地盤」ではなく、システムの作動において構成される「慣れ親しまれたもの」（vertraut）だと

いうことになる。つまり、生活世界は「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」（vertraut / unvertraut）という区別（コード）を用いるコミュニケーションにおいて呈示される世界なのである。こういった考察の結果、ルーマンは、生活世界とは「慣れ親しまれているという性格の凝縮されたもの」（Luhmann [1986=1998:108]）だと述べている。

ここで、「慣れ親しまれたもの」がシステムの作動において構成されるという考え方についてももう少し深く見ていきたい。再三述べているように、観察とは「区別をもとにした指し示し」のことである。ルーマンの使うこのタームは、スペンサー・ブラウンの学説に由来している。この考えをもとにして、コミュニケーションはその接続プロセスにおいて観察を行うと捉えることができるとされているのである。そのスペンサー・ブラウンの説においては、指し示しが繰り返し行われても指し示される値そのものは変わらないので、指し示しの繰り返しは一度の指し示しと同値である。このことをスペンサー・ブラウンは凝縮（condensation）と呼ぶ⁽⁴⁾（Spencer-Brown [1969=1987]）。

だがルーマンは、繰り返しによって「慣れ親しまれた」という性格が発生すると解釈しなければならぬ」（Luhmann [1986=1998:107]）と考える。繰り返し指し示されること、すなわち、凝縮によって、「慣れ親しまれたもの」という性格が生じる。こうした「慣れ親しまれた指し示し」の連関が、すなわち社会システム理論にとっての生活世界である。したがって、コミュニケーションという出来事が生じている限り、生活世界そのものが消え去るということは有り得ない。問題となるのはむしろ、いかなる区別（コード）が慣れ親しまれたものとなるか、言い換えれば、いかなる区別が生活世界を構成す

るかということになる。

ここまでの議論を踏まえた上で、続いて、機能システムと生活世界との関連について考えていこう。まず言えることは、機能システムにおけるバイナリ・コード、例えば「真／偽」といったコードは、それ自体「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」という区別と関連するということである。なぜなら、真と偽、法と不法といった区別（コード）が生まれたり維持され続けたりするのも、何らかのコミュニケーション的出来事の繰り返しがあってのことだからである。そうであってこそ、真なるものも真でないものも、法も不法も「慣れ親しまれたもの」として扱える。だが、コミュニケーションの繰り返しがなければ「慣れ親しまれていない区別」だということになる。「慣れ親しまれていない区別」を用いて何かを指し示すことができる可能性はかなり低い（日常的な言葉で言えば、「話題にならない」）。以上のような意味で、機能システムのコミュニケーションは何らかの生活世界を前提としている。

次に指摘できることは、機能システムにおけるコミュニケーション的出来事が指し示す対象は、当該システムが用いていた区別以外の観点から、さまざまなコンテキストにおいて「観察」される可能性があるということである。あらゆる区別が、生活世界——「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」という区別を用いて指し示される意味連関——を前提としているのだから、機能システムが観察したものにしてもまた別のコンテキストから指し示され得るというわけである。これらのことを考慮に入れても、機能システムと生活世界は対立物ではないということがわかる。つまり、生活世界は「システム」なるものに対立する何ものかではなく、慣れ親しまれたさまざまなコンテキスト

による観察において、その都度その都度現れてくるものなのである。

このような、さまざまなコンテキストにおいて観察が可能であるという事態をルーマンは「多文脈的」(polykontexturale) というタームで表現する。「多文脈的」とは、ゴットハルト＝ギンター (Gotthard Günther) の論理学に由来するタームであるが、ルーマンの所説に沿って言えば次のようなことである。コミュニケーションの繰り返しにおいて生じる「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」というコードは、いわば原初的な区別である。いかなる区別を用いるコミュニケーションであっても、その繰り返しによって「慣れ親しみ」という性格を帯びるようになることは避けられない。だがこのとき、慣れ親しまれたこの区別は、何らかの対象を指し示すにあたって用いられつつも、その対象が「慣れ親しまれたもの」かそうでないかを問題とするわけではない。そして、コミュニケーションの繰り返しにおいて、「慣れ親しまれたもの」という性格や「慣れ親しまれていないもの」という性格が——言い換えれば「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」というコードが——多種多様なコードと重なることによって、多種多様なコードが「慣れ親しまれたもの」となったり「慣れ親しまれていないもの」となったりする。そのようなプロセスの結果として、多種多様な「ものの見方」に基づくコミュニケーション的出来事が生じることになる (Luhmann [1986=1998:113])。

小括しよう。機能システムとは、バイナリ・コードに基づくコミュニケーションの接続過程である。そこでは、そのコードに基づくコミュニケーションが繰り返されている。繰り返されているので、「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」という区別も、バイナリ・

コードに関連付けられている。この意味で、機能システムもまた、何らかの「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」という区別に基づく意味連関（すなわち生活世界）を前提としているのである。機能システムの行う観察もまた、別の慣れ親しまれたコンテキストから指し示され得る。別のコンテキストから見たとき、機能システムの行う観察は慣れ親しまれたものであるかもしれないし、慣れ親しまれたものではないかもしれない。したがって、機能的に分化した社会のコミュニケーションは多文脈的だということになる。だから、生活世界を「システム」なるものへの対抗領域として描き出すだけでは、機能的に分化した社会におけるコミュニケーションの多文脈性を考えるのに十分ではないのである。

2-4 「社会統合とシステム統合」の再解釈：構造的カップリング

引き続き、「社会統合とシステム統合」の区別は、「生活世界／システム」の二元論ではない枠組でどのように捉え直せるのかということへと論を進める。ロックウツの言う「社会統合／システム統合」の区別とは、「行為者間の関係」と「社会システムの部分間関係」のことであった。この「社会統合／システム統合」という二元論の説明力を向上させるためには、いわゆるミクロ・マクロ問題を解かねばならないということは既に指摘した。ここでは、ミクロ・マクロ問題への一回答としてのルーマンの社会システム理論を踏まえ、「社会統合とシステム統合」の区別を再解釈する。

だが、既に述べたようにオートポイエーシスのシステムである社会システムは作動上閉じたシステムであり、システムと環境との間には入力や出力が存在しない。したがって、機能シス

テム間の境界相互交換は、理論の構成上あり得ないということになる。それでは、どのようにして「統合」というものを言い表すことができるのであろうか。ここでは、システムと環境との関係を言い表すためのタームである「構造的カップリング」概念を用いて考察していこうと思う。

作動上閉じたシステムとその環境との関係は、入力や出力を交換する関係ではなく、互いに攪乱⁽⁵⁾を与え合う関係として捉えることができる。ここで言う「攪乱」とは、オートポイエーシスのシステム理論の文脈で言えば、システムの「構造」に影響を与える何ものかのことである。社会システムなどの意味構成システムについてこれを考えてみると、システムの「構造」は当該システムの構成素産出のあり方ないし意味構成の仕方の基礎となるものなのであるから、環境からの攪乱はシステムにおける意味構成のあり方を変えるきっかけとして捉えることができる。このようなシステムと環境との関係が「構造的カップリング」である。社会システムとその環境との関係は、互いに攪乱を与え合い、互いの意味構成のあり方に影響を与え合う構造的カップリングの関係として捉えることができる。社会システムと社会システムとの関係、社会システムと心的システムとの関係もまた構造的カップリングである。

この構造的カップリング概念は、「社会統合とシステム統合」を再解釈するための重要なツールである。これは根拠のない主張ではない。例えば、ドイツの社会学者C. シュタルク（Carsten Stark）は、ルーマンの社会システム理論を踏まえ、システム統合が「社会における異種の部分システム同士の構造的カップリング」であり、社会統合は「社会システムと心的システムの構造的カップリング」であると述べてい

る (Stark [1994:106-107])。一方ルーマン自身は、システム統合が「同じタイプのオートポイエティックな作動に基づくサブシステムの統合」であり、社会統合が「異なる種類のオートポイエティック・システムの統合」であると述べている (Luhmann [1996])。このようなルーマンの発言を見ると、シュタルクの「社会統合とシステム統合」の再解釈はルーマンのそれに含まれていると思われる。

次に、システム統合を構造的カップリングとして捉え直すことにどのような意義があるのかということについて、オランダの社会学者L. ライズドルフ (Loet Leydesdorff) の所説を引く。というのは、彼がルーマンの社会システム理論を踏まえ、「社会の機能的分化」とコミュニケーション・コードの統合の問題について述べているからである。ライズドルフいわく、機能システム同士の構造的カップリングは、区別の相互適用 (相互の指し示し) を可能にするので、いかなるコードに基づいて意味が産出されるのかをいうことまでも捉えることができる。したがって、機能システム同士の構造的カップリングにおいては、新しいコンテキストにおける観察 (平たく言えば「新しいものの見方」) が生じる可能性がある⁽⁶⁾とライズドルフは言う。このことをライズドルフはルーマンに倣って「セカンド・オーダーの観察」⁽⁷⁾と呼ぶ (Leydesdorff [1996])。

ここでライズドルフは、コミュニケーションのコンテキストがいかなるものになるのかということの問題としている。だが、かの植民地化テーゼも、いわばコミュニケーションのコンテキストを問題にしていたのではなかったか。そのような観点から、次節では、これまで論じてきたことを踏まえて「生活世界/システム」の二元論を放棄して社会システム理論の視座を一

貫させたとき、植民地化テーゼはどのようなものとして捉え得るのかということについて、社会システムの「分化」や「統合」といったものを手掛かりに考察していく。

3. 社会システムの分化と統合

ヴィルケの言うように区別の設定が差異形成、つまり「分化」のプロセスであるが、「統合」とは分化の逆、つまり「区別の無化」だというわけではない。したがって、社会システム同士の構造的カップリングにおいても必ずしも区別があやふやになるとは言えないということになる。社会システム同士の構造的カップリングとしてのシステム統合は、ライズドルフも言っていたように、異なる社会システム間で区別が相互適用されることを含意する。例えば、「この陶器の値打ちは何円か」という問いは、「芸術」という機能システムへの「支払い/不払い」というコードに基づく指し示し (=経済システムによる観察) として捉え得るし、「トラブルをカネで解決するという行為は合法的か」という問いは、「経済」という機能システムへの「合法/不法」というコードに基づく指し示し (=法システムによる観察) として捉え得る。これらは一種の「システム統合」のプロセスである。だが、こういったプロセスは「美/醜」「支払い/不払い」といったコードを無化するわけではない。したがって、システム統合のプロセスは区別の無化ではなく、コミュニケーションの分化と統合の同時進行は矛盾ではない。

それでは、機能システムとそれ以外の社会システムとの統合 (構造的カップリング) の場合はどうか。多種多様な慣れ親しまれたコミュニケーションがさまざまなコンテキストにおいて

観察を行うことが可能だという意味での多文脈性そのものは、「機能的に分化した社会」におけるコミュニケーションの特徴ではあっても、「機能的分化」そのものではない。だが、分化は「差異形成」のことなのだから、分化とは生活世界からある固有のコンテクストにおいて観察を行う社会システムが立ち上がることだということになるだろう。ライズドルフの所説をそのまま受け入れれば、システム統合、つまり区別が相互に適用されるときに「新たなものの見方」が創発するということになる。だが、あるコンテクストにおける観察が可能性として確保されると同時に、その他のコンテクストにおける観察の可能性が潜在化するということもあり得る。翻って考えてみれば、システム統合によって却ってコミュニケーションのコンテクストが限定され、社会システムが環境におけるさまざまな出来事を指し示せなくなるという結果が生じるのではないかという疑念も浮かんでくる。機能システム同士の構造的カップリングについて考えてみれば、例えば学問のコードが経済のコードと重なり合った結果、それまで無かった新しい視点をもつ学問が生まれるのかもしれないが、同時に、経済的な意味が乏しい学問が淘汰されて学問全体の扱う対象が狭隘化する可能性もあるだろう。

植民地化テーゼとは、貨幣や権力といったシンボリック・メディアがコミュニケーションのあり方を変えていくことを指す。ルーマンもまた貨幣や権力や愛や真理といったものを「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」と位置づけているが、こういった「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」が果たす役割とは、あるコミュニケーション的出来事が選択される「ありそうなさ」（非蓋然性）を低め、接続を可

能にすることである（Luhmann [1975= 1986: 19]）。「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」のうち、権力は政治システムの「権力／非権力」というバイナリ・コードに対応し、貨幣は経済システムの「支払い／不払い」というバイナリ・コードに対応する。こう考えたとき、権力や貨幣が生活世界のシンボリックな再生産を危うくするという植民地化テーゼは、いかなる事態として描き出すことができるであろうか。ライズドルフは、「セカンド・オーダーの観察」というタームを引き合いに出し、コードの相互適用が新たな「ものの見方」を可能ならしめると述べていた。だが、ありとあらゆるコミュニケーションにおいて政治システムや経済システムのコードが「慣れ親しまれたもの」として浸透するという事態は、「セカンド・オーダーの観察」と言うよりもむしろ、多種多様な「ものの見方」が制限され、型にはまった「ものの見方」ばかりになるということであろう。このようなことを考慮に入れると、生活世界のシンボリックな再生産が阻害されるという植民地化テーゼは、システム統合——社会の部分システム同士の構造的カップリングという意味での——のプロセスによって、機能システムのコードがありとあらゆるコミュニケーションの局面（生活世界）において適用されるような事態として解釈できる。そのようなプロセスは、機能システムのコードがますます多くのコミュニケーション的局面において「慣れ親しまれたもの」になっていくこととしても捉え得よう。

だが、そのような事態は本当に起こっているのだろうか。実際には、逆にますます多くのコンテクストにおける「ものの見方」が生じてきているのかもしれない。まず、この辺りから検討作業を始めなければならない。次に、植民地

化テーゼが指し示すようなことが実際に生じているとしても、貨幣や権力だけが「慣れ親しまれたもの」になっているのかどうか、それ以外のものはどうなのかということも検討せねばならない。いずれにせよ、どのようなコミュニケーションのコードが「慣れ親しまれたもの」になりつつあり、どのようなコードが「慣れ親しまれていないもの」になりつつあるのか、ということに関する詳細な社会学的研究の蓄積が必要なのだ。その上で、レトリックの次元にとどまらずにその状況を「病理」として指し示すにあたっては、さらに細心の注意を要することになる。というのは、本稿で論じてきたような社会システム理論では、単に何かを「病理」として観察するだけではなく、いかなる区別を用いて何が「病理」として指し示されるのかということも問題となるからである。

以上まとめると、次のようになるだろう。「生活世界」なる領域に病理が生じているかどうかは、「病理」という言葉で何が指し示されているのかということがはっきりしない限り、わからない。だが少なくとも、生活世界の病理なるものを指し示すにあたって「生活世界／システム」の区別を用いて批判を「システム」なるものに向けるといふ理論構成は維持し難いといふことは言えるのである、と。

4. 残された問題

本稿では、「生活世界／システム」の二元論（すなわちコミュニケーションの行為論とシステム理論の同時使用）による現代社会の把握は問題をはらむということ、「ミクロ・マクロ問題の未解決」や「機能的に分化した社会におけるコミュニケーションの多文脈性の見落とし」といった点において示してきた。それでは、

社会をどのような枠組において捉えるのが適切なのであろうか。

近年の社会システム理論の観点からは、「社会統合とシステム統合」という区別は「社会システムと心的システムの構造的カップリングの問題」と「社会システム同士の構造的カップリングの問題」として捉え得るといふことは既に述べたが、これは「社会統合とシステム統合」の区別をアーチャーの言う「分析的二元論」として利用可能な形に捉え直したものだとは言えないだろうか。

今回は特に、社会システムをコミュニケーションの連続的接続過程と捉える考え方から、システム統合、すなわち「社会システム同士の構造的カップリング」の問題に焦点を合わせてきた。だが、残された問題として、社会統合——とりわけ社会システムと心的システムとの関係——の問題がある。例えば、心的システム（意識の再生産過程）の基盤であるコードは、機能的に分化した社会におけるコミュニケーションの布置関係によって、いかなる影響を被るのであろうか。生活世界とはコミュニケーションの繰り返しにおいて生じる「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」という意味連関のことだと述べたが、それは言わば自明性の領域のようなものであり、心的システムとも密接に関わってくるのではないか。このようなテーマは実に重要ではあるが、ここでは紙幅の都合上、別稿を期して論じざるを得ない。

最後に、本稿で展開してきたような研究スタンスの実践的意義についても手短かに述べることにしよう。というのは、社会システム理論の意義についてどれだけ丁寧に説明しても「どんなに社会システム理論の彫琢を行っても社会的現実と関わり合うわけがないので無駄だ」と決めつけ、全く聞く耳を持たない者が現れるからで

ある。

だが、例えば情報技術の発展等を背景としてコミュニケーションのあり方が大きく変動しつつあるという昨今の社会状況を想起していただきたい。多くの意味や価値、世界観が交錯し、場合によっては軋轢を起こしている。出口弘はこの動向を受け、「主体にとって意味のある認識対象から構成され、主体の活動によって再構成される世界概念」である生活世界概念を、「主体に依存した認識の総体」として再構築すべきだと述べている（出口 [1997:111]）。そのような研究方向と、本稿で行ったような社会システム理論的考察は無関係ではない。本稿ではルーマンに倣い、生活世界をコミュニケーション接続の繰り返しにおいて生じる「慣れ親しまれたもの／慣れ親しまれていないもの」というコードにかかわる意味連関として捉えてきた。このような枠組をもとに、コミュニケーションのあり方の変容はいかなる新しい「ものの考え方」をもたらしてきたか、あるいは今後もたらすことになるかというテーマを立てることができる。同様に、多種多様な「ものの考え方」の間の相克、コミュニケーション過程と自然環境との関係、コミュニケーション過程とその環境である心的過程との関係、コミュニケーション過程と社会の物質的基盤との関係、コミュニケーション過程と身体との関係といったテーマ群も、社会システム理論のテーマとして位置づけることができる。社会システム理論が社会的現実と関わらないというのは誤解以外の何もので

もない。コミュニケーションのあり方、そしてその変容の仕方が問われつつある今だからこそ、社会システム理論の検討が必要なのである。その意味で、本稿で行ってきた考察は端緒に過ぎない。

註

- (1) ただし、ハーバーマスの場合、「システム」は自動制御的な働きを持つものとして捉えられているので、シンボリック・メディアではなく制御メディアというタームが用いられている（後述）。
- (2) 他方イギリスでは、ロックウッドが提唱したこの「社会統合とシステム統合」の区別をアンソニー・ギデンズ（Anthony Giddens）が再構成している。だが、ここでは言及しない。
- (3) この文献でルーマンは中心と周縁の分化についても言及している（Luhmann [1990:423]）。
- (4) ただし、邦訳では condensation に「圧縮」という語があてられている。
- (5) この「攪乱」というタームは、オートポイエーシスのシステム理論で言う perturbation、ルーマンの言う Irritation のことである。
- (6) ライズドルフがこのようなことを言う理由は、彼がルーマンの社会システム理論を科学・技術の社会学に応用しようとし、産官学コミュニティと技術発展の関係をコミュニケーション論的に考察しようとしているからである。
- (7) 「セカンド・オーダーの観察」については拙稿（赤堀 [1997]）を参照されたし。

参考文献

赤堀三郎, 1997, 「構造的カップリングとセカンド・オーダーの観察：いかにして社会システムを『観察』するか」, 『ソシオロギス』第21号, 132-148.

Archer, Margaret. 1996, 'Social Integration and System Integration: Developing the Distinction', *Sociology*, Vol.30 No.4, 679-

- 出口弘, 1997, 「意味と情報の社会システム論 試論」, 『社会・経済システム』, 第 16 号, 107-113.
- Habermas, Jürgen / Luhmann, Niklas. 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozial-technologie*, Suhrkamp. =1987 [部分訳], 佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎訳, 『批判理論と社会システム理論』, 木鐸社.
- Habermas, Jürgen. 1973, *Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus*, Suhrkamp.=1979, 細谷貞雄訳, 『晩期資本主義における正統化の諸問題』, 岩波書店.
- _____, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp.=1985-87, 河上倫逸他訳, 『コミュニケーション的行為の理論』(上中下), 未来社.
- Leydesdorff, Loet. 1996, 'Luhmann's Sociological Theory: Its Operationalization and Future Perspective', *Social Science Information*, vol.35 No.2, 283-306.
- Lockwood, David. 1964, 'Social Integration and System Integration', in Zollschan, George K. / Hirsch, Walter (eds.), *Explorations in Social Change*, Houghton Mifflin, 244-257.
- Luhmann, Niklas. 1975, *Macht*, Ferdinand Enke.=1986, 長岡克行訳, 『権力』, 勁草書房.
- _____, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer Allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. =1993(上)・1995(下), 佐藤勉監訳, 『社会システム理論』, 恒星社厚生閣.
- _____, 1986, 'Die Lebenswelt- nach Rücksprache mit Phänomenologen', *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, LXXII, S.176-194. =1998, 青山治城訳, 「生活世界——現象学者たちとの対話のために」, 『情況』, 1998年1・2月合併号, 101-126.
- _____, 1990, 'The Paradox of System Differentiation and the Evolution of Society', in Alexander, Jeffrey C. / Colomy, Paul.(eds.), *Differentiation Theory: Problems and Prospects*, Columbia U.P. 409-440.
- _____, 1991, 'Am Ende der kritischen Soziologie', *Zeitschrift für Soziologie*, 20(2), 147-152.
- _____, 1996, 'Membership and Motives in Social Systems', *Systems Research*, Vol.13 No.3, 341-348.
- _____, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp.
- Parsons, Talcott / Smelser, Neil J., 1956, *Economy and Society*, Routledge and Kegan Paul. =1958, 富永健一訳, 『経済と社会』(I・II), 岩波書店.
- Spencer-Brown, George. 1969, *Laws of Form*, George Allen and Unwin Ltd.=1987, 大澤真幸・宮台真司訳, 『形式の法則』, 朝日出版社.
- Stark, Carsten. 1994, *Autopoiesis und Integration*, Verlag Dr. Kovač.
- Willke, Helmut. 1987, 'Differenzierung und Integration in Luhmanns Theorie sozialer Systeme', in Haferkamp, Hans / Schmid Michael (Hrsg.), *Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung*, Suhrkamp, 247-274.

(あかほり さぶろう)